



第95回

ゆきてかえりし物語

※2024年11月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

冒険の前には必ず遺言を残す。

11月10日開幕の単独、無寄港、無捕球による世界一周ヨットレース「バンデ・グローブ」に海洋冒険家の白石康次郎さんが挑む。今回が3回目の出場。4年前の前回大会ではアジア勢で初の完走を果たした。今回は、前回の16位を大幅に上回る8位入賞を目指す。

バンデ・グローブはその過酷さから「海のエベレスト」とも呼ばれる。フランス西部を出発し、大西洋を南下。アフリカ南端の希望峰を経て南極大陸を左回りに進み、大西洋を北上して戻る総距離約4万5000^{キロ}（約2万8000^{海里}）のレースだ。

東京都内では壮行会が開かれた。白石さんは「毎回、今生の別れのつもり。心の隙^{すき}があると油断につながる」と気を引き締めた。

1989年に始まったレースは今

回で10回目。完走率は60%に満たず、かつては死者も出た。「完走者は宇宙に行った人よりも少ない」というのが、このレースの歌い文句だ。冷たい南極海で落水すると助かるのは難しい。近年は格段にスピードが高まる水中翼の使用が認められ、高速化に拍車がかかる。参加者はヘルメットの着用を求められ、脳しんとうへの対処法なども学ぶ。

危険と背中合わせの冒険に向けて旅立つ者もいれば、その冒険から戻る者もいる。

写真家の石川直樹さんは11月、ヒマラヤにあるシシャパンマに登頂し、世界最高峰のエベレストなど14座ある8000^{キロ}峰^{メートル}の全ての頂に立った。石川さんは2023年の秋、13座目に

登頂。続けて最後となるシシヤパンマに挑んだが、この時は思わぬ形で阻まれた。

「米国人女性初」の14座達成を懸けて激しく争う2チームが、目の前で相次いで雪崩に巻き込まれ、計4人が亡くなったのだ。

石川さんは当時の様子や心境を週刊新潮の短期連載「最後の山」でこうつづっている。

「ぼくは（略）軽く震えた。アンナたち三人が流され、次にジーナたちが頂上直前で流される。こんなことってあるだろうか」

「シシヤパンマの神が怒ったんだ、としか思えなかった」

帰国した石川さんに会った。今回、登頂の傍らジーナさんの遺体を捜したが、痕跡は見つからなかったという。「記録のために争い、雪崩で亡くなった。悔しいというか、むなしいというか」

冒険は無事に戻ってこそ。困難に挑み、乗り越えた者が語る「ゆきてかえりし物語」は、人を魅了してやまない。